

青年期における死生観と心理的発達

丹 下 智香子

I 問題

「死」というのは、人生の中では他者のものとして会うことが多いが、いつかは必ず全ての人に訪れる事象である。今井(1991)やシュナイドマン(1980)にも述べられているように、我々が「死」を問題にした場合、単なる恐怖(又は不安)だけでは表現され得ない、様々な側面が存在するのであるが、これまで心理学の分野において死は恐怖や不安といったネガティブな面のみに焦点づけられてきており、その他の見方や隣接する領域の知見を生かすことなく見過ごしてしまっている。また、現在のところ死を扱った研究ではその概念規定が試みられているものは少なく(今井, 1989)その上この領域で最も頻繁に用いられている尺度である Templer (1970) の Death Anxiety Scale (DAS) は死生観を単一次元的なものとして扱ったものであり、更にその測定しているものは死に対する不安ではなく一般的な適応に関する事柄である(Levin, 1990)という指摘も為されており、研究自体多くの問題を含んでいるということも否定できないのである。

また、死という問題が個人にどのように扱われ、それが個人の発達とどのように関わっているのかに関しては、子どもの死に関する概念の発達は Piaget の認知発達レベルとの密接な対応関係を示すという結論が示されているが、それ以降の発達との関連や、「死生観」というレベルで考えた場合には、死に対する恐怖の強さの年齢差という形での研究はいくつか存在しているものの、明確な発達の視点に基づいた研究はほとんど存在していないのである。死生観というレベルで死を考えた場合には抽象的な思考能力や自己の人生に対する取り組みを行うことが必要とされるが、こういった点からすると死生観は単に加齢に伴って変化するというよりはむしろ、発達との関連で変化する可能性が示唆されるのである。すなわち、青年期に起きる諸システムの変化は死生観の形成にとって必要な能力的な下地をもたらすのであるが、こういった内的な変化や他者の死の経験等の外的な事象により死生観は形成されるのみではなく、死という事象を自分なりに理解し自らの価値観や信念体系と対立しない人生の一要因として組み込むという、より能動的な構えも大きく関わっているものと推察される。また死という、

自己の存在そのものに関わるような大きな問題は解決しようとする過程において非常に困難さを伴うものと考えられるが、この過程は同時に自らの人生や自己そのものを扱う過程でもあり、死という問題は人間の発達と関係していると考えられる。その方向性としては、死を生と対立するものとして扱い、恐怖の対象として見なしているのみであるよりは死も人生の一部であることを十分認識した上で両者の関係性やその意味を探索していくことが最も効果的かつ現実的な対処法であると考えられるため、死生観は発達するにつれてより多次元的に分化していくものであり、トータルなレベルでより肯定的になっていくものであると考えられる。

II 研究1

<目的>

青年期的な発達と死生観の関係性及び死生観の発達の变化の方向性を明らかにする。

<方法>

高校生・大学生・看護学校生・専門学校生532名(男229名, 女300名, 不明3名)を対象に死生観尺度(丹下, 1993を一部修正)及びエリクソン心理社会的段階目録検査(中西・佐方, 1993)を実施した。通常は質問紙の内容は明言しないものだが、本研究では被調査者に対するネガティブな影響を避けるために、実施の際に質問内容が死に関するものを中心にして進められること及び回答拒否ができることを被調査者に明示した。

<結果と考察>

死生観には「死に対する恐怖」「生を全うさせる意志」「人生に対して死が持つ意味」「死後の生活の存在への信念」「肉体と精神の死」等の側面があるが、死生観は親しい人の死という直接的な経験のみによって形成されるというのではなく、間接的な死の経験(小説やニュース等)を通してであっても同様に形成されるのであるし、単に死にまつわる直接的・間接的な経験をすることによってその人の死生観が決定されるのではなく、その経験をした後にその個人がどのような形でその事実に対処していくかということが大きく影響するということが示されている。

自我発達の度合い別に死生観下位尺度間相関を算出したところ、大部分において低達成群の方が相関係数の絶

対値が高い傾向にあり、自我が発達するにつれて死を多次元的に分化してとらえるようになるという傾向が伺われる。また、両群の死に対する恐怖の強さには有意な差は示されていないものの、高達成群の方が人生を全うさせることに強く方向付けられながらも人生に対して死が持つ意味を強く認識するようになるという結果が示されたことから、総合的に考えれば発達するにつれて人は死に対して肯定的な見方をすることが可能になるといえよう。

Ⅲ 研究2

<目的>

研究1で得た示唆を基に自己受容と自己投入という二側面を組み合わせることで発達のより細かい指標とし、死生観との関係を明らかにする。また、死生観尺度の有効性を検討する。

<方法>

高校生・大学生489名（男183名、女299名、不明7名）を対象として死生観尺度、DAS、自己投入尺度（加藤、1983）、自己受容尺度（板津、1994）を実施した。このうちの57名については3週間後に死生観尺度及びDASの再検査を行った。

<結果と考察>

目下発達の課題に積極的に取り組んでいる人は死に対して両価的な姿勢を示すが、既にある程度発達しており、なおも成長・発展に向けて前向きな姿勢を示す人は死に対する恐怖は軽減されないにせよ生きることに積極的になりながらも死を人生の一環として受けとめる気持ちがでてくる。また、ある程度発達していても現状に満足して更なる前進に消極的な人は現実自己のレベルでの死を嫌がるが、発達の度合いも低く、非目的かつ消極的に生きている人は死に親和的であり、人生に対して投げ遣りな姿勢であるという結果が示され、より詳しいレベルでの死生観と発達の関係性の一端が明らかにされたと言える。

死に対する恐怖尺度がDASと.63の相関で、他の下位尺度は無相関～弱い相関にとどまったということから、死生観は一次元的な、恐怖や不安のみで語りうるものではないということが実証された。また、死生観尺度の信頼性を再検査法で検討したところ、大体の下位尺度にお

いて十分な値が得られたことから、本研究で使用した死生観尺度は改良すべき点はあるものの、先行研究において使用されてきた尺度と比較しても遜色はなく、更にそういった尺度では扱われてこなかった死をめぐる他の諸側面についても測定できるという点において有効な尺度であると考えられる。

また、死に関する質問に回答拒否した被調査者の特徴としては、トータルな自己投入得点においては死に関する質問に回答した被調査者と量的な差を示さないにも関わらず、その時間的な指向性において明らかに現在指向的であるということが示された。

Ⅳ 全体の考察及び今後の課題

死生観と心理的な発達は相互に影響しあうということが推察され、また狭い範囲の年齢層を対象としたことに由来する面もあるが、死生観の発達的变化は必ずしも死に対する恐怖の軽減という形ではなく多次元的に分化するという質的な変化及び下位の側面における量的な変化として表される可能性が示されており、これは従来の研究で扱われてきた「死に対する恐怖（又は不安）」という視点のみでは明確化し得ない部分である。

また、青年期の未発達な時期に頻繁に死について考える傾向が示され、人生について疑問を投げかけるのと同様に死について考える時期があるが、人生と死を対立的にとらえていると自我同一性の達成に向けた内的作業が進行し、人生というものに対して真剣に取り組めば取り組むほど「生きる」ことに対する葛藤状態が生じることとなるため、その解決策として人は死を人生の一環として受け入れ、その意味を認識しつつも生きることに意欲的になるのであり、死という一見不条理な、解決が困難な状況に直面しても、自らの人生を自らの打ち立てた原則に基づいて生きるという目的的な、積極的な姿勢でその問題に取り組むことによって最終的には死だけではなく人生に対してもより発達した域に達することが可能になると考えられる。

今後の課題としては、本研究において青年期に焦点付けて探ってきた発達と死生観の関係が、老年期の「死の受容」に至るまでにどのような形で発達と関係し、変遷していくのかについても研究を進めていく必要があろう。